

広場

宮本百合子

青空文庫

大階段を降り切った右手のちよつと凹くぼんだようなところで預けてあつた書附をかえして貰うと、更に六つ七つの段々からウラル大理石を張つた広間へぬけ、大きい重いガラス扉を体で押して外へ出た。

暖い冬の匂いのするトウウエルフスカヤ通りの雑踏が、朝子の目立たないその姿を忽ち活気の溢れた早い自身の流れの裡へ巻きこんだ。日光はあたたかく真上から市街を照らし、建物の錆びた赤や黄色の外壁をぬくめているが、ふと行きずりの通行人の外套

からは、もう何処かに消えない霜があることを知らせる匂い、懐しい毛皮の匂いなどが軽く空気の中に漂っている。

手をはめた片手は深くポケットへつつこみ、片方の手で質素な茶色外套のカラーのところを引つけるように抑えてベレーをかぶった顔をうつむけたまま、朝子は暫く機械的に歩いた。

プーシユキンの立像のある並木路の切れめまで来て、その広さが朝子を我にかえらした。

朝子はうつむいていた顔を初めて擡げ、一遍みたものをもう一度見直すというような眼差しで、歩道に籠をもって並んでいる向日葵の種売りや林檎売り、色紙細工の花傘の玩具を売っている黒い服の纏足した支那婦人などを眺めた。どうしても外套を引つけ

ずにはいられないような感動はまだ去っていず、電車をやりすぎす間そうやって立ち止ってそんなものを見ている自分の顔つきに動顛のあらわれていることを、朝子のはつきり感じるのであった。

この都会に自分がのこって暮せる。そんな可能を思ってみたことがあつただろうか。西ヨーロッパを旅行して来てからは一層新鮮な理解と愛着とを感じて、謂わば胸元をおしひろげて日夜揉まれているこの人波の中に、本当にその群集の一人としてとけこむことも出来るのだというようなことを、考えたことがあつただろうか。それが、今突然、実にたやすい、むしろ当然なことのうつりゆきのようにして、朝子の前に示されたのであった。朝子と友達達の素子とが、この年のうちには故郷へ向って出発するときまっ

ている今。――

いくらかくつろぎながら、しかしひとりでにまたうつむいてしまふ思いにとらわれて、朝子は自分たちの住んでいるホテルへの角を曲った。階段の途中で、絨毯じゅうたん掃除をしていた掃除女のカ―チャが道をあげると、何とも云えない底に輝きのこもったような優しい、同時に心はうつろのような微笑を与えて、朝子は廊下の奥にある室のドアをあけた。

「ただいま」

左手の窓に向つて机についている素子は、あつちを向いたなり、それにこたえる声を出した。朝子はのろのろした動作でベレーをぬいで入口の帽子かけにかけ、外套をぬいで同じところへかけ、

自分のベッドの傍へ行つてそこへ腰をおろした。部屋は割合ひろくて、さっぱりした薄青い壁の上やあっち向きの素子の両肩のあたりに、二重窓からの少し濼んだ明るみがおどっている。一つの高い本棚を仕切りにして、朝子の机は右の窓のところにあった。

「どうした！」

「ふうむ」

「いたんだろ！」

「いたわ」

ペンの速さをまして最後の行を書き終る様子が、はなれている朝子のところから見えた。

「——どうしたのさ」

やがて椅子の上で、くるりとこつちを向いた素子の棗形の顔の上に、急に拵がつてゆく驚駭の表情を見ると、朝子はとりも直さずそこに自分の動乱が映っているようで何とも云えない苦しい気がした。けれども自分の顔つきをかえる力は、今の朝子にないのであつた。

「どうしたのさ」

どうというところに特別力をこめて云いながら、素子は何か警戒するように、離れている二人の間にある距離の助けで何かをそこからさぐり出そうとでもするようになり、凝つとその場を動かさず、部屋の中を往つたり来たりしはじめた朝子を見守つた。

やや暫くして、素子が一種の皮肉を帯びた声で、

「何か云われてでも来たんだらう」

と云った。素子も、きよう朝子が訪問した老人は知っており、きよう朝子がそこへ行ったことも知っているものであった。朝子は黙つたまま暗く複雑な光をもつて自分に注がれている素子の眼の中を真直に見た。素子は、

「どうせそんなことだろうと思つた！」

そして煙草に火をつけて、長く烟をけむりふきながら上の方を見ていたが、

「のこれって云つたんだらう？」

いくらかやさしく訊いた。朝子はうなずいた。

「そりや、あなたにはそう云うさ」

その語調には深く傷けられた素子の気持と自嘲とが響いた。

「そりやあなたには云うさ、私には云わないよ。そうだろう？」

ハ、ハ、ハ、と苦しそうに区切つて顔を仰向けながら素子は甲高く不自然に哄笑した。そして、笑つたので溜つた涙を拭くという風に、眼鏡を手の甲でもちあげて眼をこすつた。朝子は自分の心の動揺とともに、そういう形であらわれる素子の混乱も見えない気がした。幾分子供らしい恐怖の浮んだ表情になつて朝子は熱心に、

「でもその話は、作家としてのことなのよ、そういう範囲でのことなのよ」

と云った。

「どつちだつて同じことさ」

そして再び机の方へ向き直りながら、

「どうでもあなたの考える通りにすればいいが、私は、あなたの
おつ母さんたちに妙な云いわけ役をさせられることだけは真平御
免だからね。それだけは前もつておことわりだから。帰らないん
なら帰らないでいいから、はつきり手紙でも何でも書いといても
らおう」

ここで暮した三年を入れれば、朝子たちは六年ほど一緒に暮し
て来た。その年月のなかで二人の女はどつかで少しづつ少しづつ
ちがったものになって来て、今さけがたい一つの岐点にぶつかつ

た。そのぶつかり工合にも、何かめいめいの角度というようなものがある。それがあらそえない形で現れていることが痛切に感じられるのであった。

寝台の枕の上へ横になった顔を押しつけて考えこんでいるうちについてとろりとした朝子は、やがて、

「御飯までにケラシン（炊事用石油）買って来とかなけりや駄目なんだろう」

と云っている素子のそっけない声で、びつくりして起き直った。素子はわざとこつちに背を向けたまま、自分の声の素っ気なさを意識している調子で云っているのであった。

朝子は黙って立ち上って靴をはきかえ、衣裳戸棚をあけて太い

麻糸でこしらえた買物袋をとり出した。その大きい衣裳だんす箆筒の左側の小さい棚が、このホテル暮しの彼女たちの食器棚になつていたのであつた。帰る時が目前に見えてから素子は焦立たしいような執着で朝から晩まで机と本にとりついていて、日々のそんな用は朝子のうけもちのようになった。

「じゃ行つて来る、ほかに用ない？」

「私はないよ」

ホテルを出ると、朝子はさつき来たとは反対の方角へ急ぎもせず歩いて行つた。裏通りになるその辺の車道は古風な石敷道で、永い歲月のうちに踏みへらされた敷石のどれもがいろんな不規則

な形に角を磨滅されている。そのごろごろした石と石とのすき間はひろく深くて歩き難く、冬日のなかに何処となし馬糞のにおいが漂った。重い蹄鉄をうった荷馬が車輪をその石敷道の上ではね上らせながら通つて行くと、元気よく石をうつ蹄の音や車輪の音が灰色つぼい左右の建物に反響して、再び下を歩いている朝子のところまでかえつて来る。何かの塀で行き止りになった小路の左側に石油販売所があつて、もうその歩道には二十人ばかりの列が出来ている。朝子はその列の尻尾についた。油じみた販売所の鉄扉は開いていて、かわまえだれ鞆前垂の男の姿がチラついていて、まだ売り出してはいない。日本の雀よりすこし羽色が黒つぽいようなこの都会名物の雀たちが、日向にころがされてあるドラム罐の上

から、チュと嘯つて飛び立ったりまた戻つて来たりして遊んでい
る。その有様を眺めて、朝子は列の動き出すのを待った。素子と
二人分の切符で瓶が二本買えた。

それからパン屋へ行つて、ここでも列について一日分のパンを
買った。朝子は夜のお茶にたべるものがなかつたことを思い出し
て、街角三つばかり先の食糧店の半地下室へ下りて行つた。

入口近くにいくつも並んだ胡瓜漬の大樽、鮮やかな朱だの水色
だの不思議な色をした塩漬キノコの桶。そんなものから立つ匂い
は林檎だの、奥の方にどつきりつるしてある燻製魚だのの匂いと
混りあつて独特の親しみある匂いで天井の低い店じゆうを充して
いるのであつた。朝子は買物袋をぶら下げながら、あちこち見て

まわった。そして、手間どつてイクラだの酸っぱくした牛乳だの
 小魚の燻製だのを買った。紅茶と石鹼がきよう入荷したばかりで、
 それをめあてに押しかけた人で、勘定場の列は全くのろのろと動
 いているのであった。靴の底を擦つて皆が一步一步動いている石
 張床は、今に雪が降るようになるかと泣つてころばないために、入
 口の段々のところからずっと大鋸屑おがくずをまかれる。雪でしめらされ、
 群集の湿気でむされる大鋸屑からは鼻のつんとするような匂いが
 立ちのぼつて、午後の三時ごろからもう電燈の煌かがやいている店内に、
 何とも云えず陽気な雰囲気をふりまくのである。

朝子は、三年前の十二月の雪の晩のことを思い出した。シベリ
 ア鉄道から停車場についたばかりの素子と二人が、馬車にゆられ

ながら、幌から首をさしのぞけるようにしてどんな感動で降る雪の間に燦めいている商店の窓々やその上の方に暗く消えこんでいる夜空を眺めたことだったろう。それから何度この食糧店へも来たか数しれないわけだが、思えば、こういう平凡そうな日々の営みの中から今日までに自分が獲て来ているものを考えると、朝子は新しい感動を覚えた。今帰国をひかえて自分たちが当面している問題にしろ、それに対する自分たち二人の心理のそれぞれのがいにしろ、心づかない間につみ重ねられて来ているその原因をつきつめてみれば、朝子にはやっぱりこの食料店コンムナールの北国風の匂いも切りはなせないものとして考えられるのであった。

素子は専門のこの国の文学研究のために来た。小説をかく朝子

は、アンナ・カレーニナなどという小説でごく身近に感じられて
いる色彩の多い古い国、しかもそれが見ず知らずの新しいもの
なりかかっているという国、遠いところからの賞讃と誹謗とで渦
巻いた中に遙に見える国の生活に好奇心を抱いて来た。素子も朝
子も初めのうちは、同じように、それぞれの程度で語学の勉強を
はじめたりしたが、暫くすると、一部屋住居の彼女たちの暮しに、
同じ時刻の別な暮しかたが始った。素子のところへ教師が来ると
彼女は朝子にその部屋を出るように云った。廊下にいることはで
きにくかったから、朝子はその都の案内書をたよって、いろんな
場所いろんな人の集るところへ出かけた。二人の書類についての
面倒くさいかけ合い、本屋で素子の必要な或る本をさがし、なけ

れば注文する用事、それから日用品のこまごました買い出し、そういうことが素子の机に向っている時間、朝子の生活をみたすようになつた。そして何と面白いものだろう。この古くて全く新しい国が一九二〇年代の終りから三〇年にかけて経験した二十四時間、食物でも紙でも衣類でもひどく品不足で、キャベジの四分の一塊りのために朝子はたくさんの道のりを歩き、長く列につき、なおあの五つの大キャベジも自分の一人前のところでなくなり、しないだろうかとはらはらした。バターやチーズがなくなった。それは農民が牛を殺してしまつたからだというけれど、何故牛は殺されるのだろうか。朝子は自分たちの生活の朝から夜につづくあらゆるそういう現象の意味を知りたくて読書した。

素子は何冊も古典や現代の詩を教師とよんだ。詩韻の解剖をやった。専門の勉強は進んだし、夏や秋の大きい旅行は素子のプランにしたがつてやられ、同じように世界の古い背骨といわれる大山脈やテレクの川風に吹かれたのだが、朝子が街の喧囂けんごうの裡で群集の感情にふれ、自分の感情をも吟味し、こんな不如意をどうしてこんな元気でしのげるかという一般的なおどろきから、やがてその理解に入って行く塩梅とは、どこやらちがうものがあつた。そんな違いも互に認めあつていて、かいぎやく諧諔かいぎやくの種ともなつて来たのであつたが、今、突然朝子にだけそこでの生活を一層承認し保証する意味をもつ居のこりの可能が示されたことは、朝子自身に亢奮なしで感じられないとおり、素子には何か自分だけ三年の果

に本の荷箱と一緒に荷って放り出されたような、沮喪させられる切なさであることもわかるのである。素子がひとりかえるとすれば、それは文字どおりのひとりで、生活においても、心においても、朝子とはちがうものとして、朝子を承認したものに承認されなかつたものとしての自分を自分に納得させなければならぬ。しかしそれは素子にとってどんな苦痛だろう。その苦痛が、情愛の問題より深刻に二人の人間としての精神に切りかかって来ているものであることが、さつき重い扉を押してトゥウエルフスカヤの通りへ出た時から朝子には^{ひし}轟と感^じじられていたのである。うっかり考えこんでいるので、朝子は自分がもう勘定場の前まで来ていたのに気がつかず、黒い布で頭を包んだうしろの年とつた女か

ら、

「どうしなさったね。財布でもおつことしたのかね」
と注意された。

二

朝子の気持は素子にもよくわかつていると思えた。朝子はつまりは自分で決心するとおりに行動するだろう。これまでずっと、そして生きて来たとおりの。だが、その決心はまだ心の中にきまらずにいる何かの理由でかためられていないのだ、と。そういう自分の気持が、素子にありのままうつっていることを朝子もまた十

分知っていた。二人は、翌日になつてもどつちもその問題にふれなかつた。けれども、薄青い壁にかこまれた部屋の空気にはこれまで二人のいる処になかつた一種の緊張した、神経質な空気が漂いはじめた。大体に口数が少くなり、笑うこともなくなつた一日の中で、素子は頑固に机に向つているが、神経の端々はいつも水色のジャンパアを着た朝子のまわりに動いていて、その心のうつり行きをうかがっているような雰囲気である。

部屋の真中に立っている本棚の仕切りの右の窓べりで、朝子はひっそりとして勉強していた。窓じきいには、プロストクワシヤ酸化牛乳のコップが世帯じみた光景をかもし出しながらのつている。朝子は辞書を絶間なくひっくりかえしながら翻訳をしているのであつた。

歴史で有名な或る婦人の伝記で、特別文学的に書かれているのでもなかつたから難解ではなかつたが、慣用語で朝子の知らないのが少くなかつた。朝子のつかつてゐる字引にはそういう細かいところまで出ていないのであつた。紙きれにそんなのを幾つか書きつけた。そして仕切りのむこうから煙草の煙が流れてゐるとき、それを素子にききに行つた。

「ちよつと、これ何ということになるのかしら……」

素子はこれまでの二人の生活の習慣から何ということなし黙つて、朝子が目の前に出してある紙きれの上にかかれてゐる下手な字を読んでいたが、読み終ると急にこみ上げる激しい感情に喉をせかれたような声で、

「自分にやれると思ったので引受けたんだろうから、ひとりやったらいいだろう」

突っぱなして云った。そんな仕事を朝子が熱心にやっていることも今の素子には腹立たしい刺戟である。それがあらわに示された。これも、今おこっている問題と連関をもっていた。朝子としては、仕事そのものより、自分の誠意の問題として大事に考える種類のことなのであった。

突っぱねられて、朝子は悲しい顔をした。そういう態度で素子が自分の個性にだけ立てこもって二人の距離をひらいてゆくようなのが、朝子にはこわくてまた悲しいのであった。それなり暫く朝子は傍に佇んでいたが、やがて自分の机へ引かえした。到頭、

そんなことを云わないで、という言葉が朝子の口を出得なかった。今度の問題は、素子がそれほど恣意的に振舞う筈のものだろうか。そういう素子を隔たった眼で眺める心が、朝子のうちにもかき立てられた。

窓の外に視線をやつて頬杖をついていたら、顔をこつち迄現わさないで、素子が新版の大きい辞典を机のはじへ突き出してよこした。

「それを見れば大抵のものはある——」

朝子は無言でしずかにそれを自分のよこへ置き直した。

自分の心のうちの動揺を整理してゆく手がかりにも思えて、朝子は一心に誰の助けもかりずその仕事をつづけているのであつた。

その間にも素子は、二人が帰国の準備として立てていた計画を決して変えようとせず、躊躇したり見合わせたりせず、今は、どつちみち自分は帰るんだからと押し出したテンポで着々すすめて行つた。そのことのために、自分は益々机と本とにつながられ、朝子はやはりこれまでのとおり毎日遠方の出版社へ定期刊行物を予約に行つたり、役所へ行つたりした。そんな場合、朝子は自分の生活にとってそれ等の事務的な用件の現実性が全部遠くなつたような奇妙な心地と、もしかしたら素子のためにこのよふなことをしてやる最後かもしれないという生活の転機を自覚した名状しがたい心持とを、同時に経験するのであつた。

火曜日の夕方、出がけに素子が外套を着ながら、この頃では珍

しいあたり前の調子で、

「今夜はどうする？」

ときいた。一週に二度ずつオリガという女友達のところへ行つて、素子は読んでいる小説の俗語の云いまわしをきいて来るのであつた。

「さあ……」

朝子も立つて来て、身仕度をするのを見ながら、

「どっちでもいいけれど、私は——」

「おいでよ。この間もオリガさんがきいてたから。何故この頃来ないのかつて」

「じゃ行くわ、二時間もして行くわ」

七時になると、朝子は身仕度して、城壁の傍の広場まで歩いて、そこからバスに乗った。市の外廓に向うバスはその時刻にはごく空いている。市街の中心を大分出はずれた大きい四辻で降りて、人通りの疎な、薄暗い往来をすこしゆくと、古風な彫物の窓枠をもった木造の家があつて、寂しい板囲いの塀がそれにつづいていゝる。板囲いの木戸を入ると、楡の大木の生えた内庭があつて、オリガの住んでいる二階へあがる木の段々が、いきなりその内庭へ向つて開いているのであつた。階下に住んでいる家具職人の窓から洩れて来るぼんやりした光をたよりに一段一段のぼつて行つて、ドアをあけ、天井の低くかぶさつた小部屋の灯の下に白いブラウス姿でいる血色のいいオリガの顔を見たら、朝子は思わず、

「ああ来てよかった！」

そう云つて、オリガの堅い力のある手を握つた。

「今更みたいに！」

オリガは笑いながら、テーブルのむこうの素子を顧みた。

「私のところは、いつ来ても、来てよかつたところじゃありませんか、ねえ、モトコさん」

素子は何とも云わず煙草をくゆらせ、しかし朝子が現れたときの最初の一瞥でやはりその心の中まで調べずにはいられないような視線を走らせたのであつた。朝子は、オリガとあれこれ世間話をした。オリガは勤人で、その小部屋には寝台と一つの本棚と箆筒とその上に飾られた何枚かの写真とが、僅かの家具類と共にあ

るだけであつた。そんな生活の道具だてのなかに一種の居心地よさがこもつていて、さつぱりした住みでの人柄が感じられた。

「あなた方、かえる迄にもう何度来られるかしら。一つおいしくお茶を入れて御馳走しましょう」

石油コンロで湯をわかし、オリガがジャムをとりわけていると、その手元を見守つていた素子が遂に辛棒しきれなくなつた風で、「私が帰ることは確だけれど、朝子さんがかえるかどうかは知りませんよ」

変にしずかな声で云つた。オリガは、

「本当に？」

びつくりした表情を素子に向け、朝子に向けた。

「モトコさん真面目に云っているの？」

「真面目さ」

朝子は困惑した顔つきで黙っていた。その顔をじつと見ていて、オリガの皆まなじりに皺のある大きい眼に思いやりの柔かみが浮んだ。

「それで——もう決定したの？」

「いいえ、まだ」

誰もそれ以上は云わず、暫く皆だまり込んでしまった。やがてオリガが、自然に話題をかえて自分の小さい甥の噂をはじめた。それからまた一転して、今度は素子と俚ことわざ諺の話がはじまった。

その話では素子が感興を面に浮べ、帳面をひろげて書きこんだりしている。

朝子はこの問題がおこつて以来、初めて、いいえ、まだ、という二言で素子の前にも自分の心を表明したわけなのであったが、その言葉に出された自分の声を聴いてみると、一面では至極当然簡単に決定しそうなことが決定しかねているという、心持の撓しないに愕く気持がつよく湧いた。

話が切り出された初めから、ここに止つて作家として活動すれば最低で二百万部は出版されるのであるしというような点は、朝子の心にそう深く刻まれなかつた。朝子を感じさせたのはそれよりも、ここに止つて活動し得る作家としての評価であつた。自分が作家としてそれにいくらかでもふさわしい者だという、その大きい駭きと歓びとの激しさであつた。その感動が余りひどくて動

顛に近い心の波をおこしたとともに、今、いいえ、まだ、と云いつつその心持の限りでは、こころからの受諾を感じるのであつた。涙の浮ぶ混り気なさでそれが感じられている。でも何故それなら、いいえまだ、なのだろう。

朝子は同じ小テーブルの向い側にぼんやり見ていた素子の物を書いてある頭のところへ、改めて我が目を据え直したという眼瞬まばたきかたをした。そこまで考えを追いつめてみれば、もうそれは素子の感情などとは関係なく、この問題そのものうちに含まれている何か、朝子に「いいえ、まだ」もうすこし深まることがあると、微に、しかし決定的な粘りうごめで蠢うごめいていると感ぜられるのであつた。

オリガの家の板囲いの塀を出ると、素子が、

「どう？ すこし歩こうか、いや？」

ときいた。それは出がけに朝子が気付いたよりも、更に^{いたわ}筋りの加つた調子であつた。オリガへの返事を、素子がどうとつて、どんな自身の心持のよりどころとしたのだろうか。そういう不安と詮索が閃いたが、朝子はおとなしい口調で、

「じゃ、あの赤いお寺の横までね」

と承知した。心に新しく浮び上つて来たまだ形のはつきりしない考えの重さが、ひとりでに朝子をおとなしく引き緊めているのであつた。

丁度いろんな集會が終つた刻限で、店舗のないその辺の薄暗い

歩道も活気を帯びていた。この時間に朝子たちと同じ方向へ歩いているのは僅かで、むこうの闇からぼやけた輪廓をぐんぐんと近づけて来る通行人たちが、あとからあとから擦れちがいざま、パツと街燈の光の圈に入った刹那だけ様々の顔立ちを夜霧と白い息の交ったなかに見せ、忽ち通りすぎてゆく。

大劇場のある城壁近くの広場は、人波のひいた直後の深夜の寂しさが通りにみちていて、ゆるい勾配で上りになっていゝるそこを、ホテルの方へゆつくり歩いた。ぽつりと素子が云った。

「作家がね、自分の国の言葉で書けなけりや仕様がないだらう？」

——私はそう思う」

言葉というだけの意味でなら、朝子におこっている話の場合、

それは云わば先ず第一に朝子として出したことであつた。日本語のわかるものがいくらもあるんだから、そんな心配はいらない。朝子は日本語で日本のことを書けばいい、と云うことになつていたのであつた。

「語学の条件としては、解決しているんだけど……」

「日本語で書くわけか……日本のことを？」

「ほかに私として意味がないわけでしょう」

素子は黙っている。

日本語で日本のことを小説に書く……ここで。——その觀念には、夜空にプラカードのはためく人通りのすくないこの歩道の上で、ここの生活を日本へ書いて送つていたこととおのずから違つ

たものとして、朝子の実感にふれて来るぼんやり居馴染なじめもないものがあることもおおえない。二人は、一つのことをあつちの端とこつちの端とで考えている表情のまま、黙ってホテルの階段をのぼって行つた。

三

どんな気持で、素子はあるなことを特に云つたのだろうか。彼女が文学に対してもっている理解からの誠意で云われた言葉だったのだろうか。それとも、時々素子が実際に当って發揮する非常にこまかい暗黙の伶俐さから投げた暗示のようなものだろうか。

素子の顔からは何も読みとることは出来なかつた。二人はやはり用事のほかは余り口をきかず、素子は自分の苦しきからの目立つた意地わるからは抜けて、しかし一定の距離から内へふみこまない態度でいたのであつた。誇張の消えた事務的な調子で、素子は本を詰めて送るための木箱を催促に自分で行つたりしている。

その晩二人は劇場にいた。いつも満員の劇場だが、今夜は或る青年劇団の特別出演で、二階のバルコニーの段々へまで見物人がつまっている。天井から平土間まで、溢れる若々しい活気をやつと抑えているような何とも云えないざわめきが満ちていて、幕があがると舞台の上の若さと見物席の若さとが両方から無邪気にかげよつて一つ世界にはまりこむような熱中が感じられるのであつ

た。大体が芝居と音楽好きがこの国の連中のことだとは云え、その夜は全く特別の光景であった。年寄連中の気分もひとりでに釣りこまれて、陽気に頬を火照らしながら、手のひらに持ったリングを時々かじりながらあちらこちら見廻している。

朝子は、平土間の中頃に余程前から心がけて買っておいだ席があつた。初めちよつとした青年生活を諷刺した笑劇で、爆笑哄笑のうちを終ると、バルコニーの席にいる若い見物人たちが、その芝居のなかで歌われた短い快活な唄を忽ち覚えて合唱しはじめた。こまかい節まわしのところはうまく行かなくて笑声混りにごちやつきながら、終りの

おお

われら 若い者――

われら 若い者

という反覆句リフレインになると、それまではひよろひよろしながらついでいた声も急に目の醒めたような心からの力で、

おお

われら 若い者

と声を揃えて歌い切るのである。朝子はあらゆる感覚を開放して、その歌声と雰囲気とに浸り込んだ。ふりかえってバルコニーを見上げれば、その一団の若い男女は別に誰にも見てもらう気もなく自然な感興のまま淡白に自分たちの間で拍子をとって歌っている。生活のよろこびは天真爛漫で、そのよろこびを合理的に現実的に

自分たちで刻々につくっているものの寛闊な拘りなさもつよく感じられるのであった。

これに比べて、自分の感動は何と複雑で、ある感傷を常にもつていることだろう。それらを眺め、感動している自分の心のニュアンスの相違が、新しいおどろきでその晩は朝子をうった。こういう精気溢るる情景にふれる時、この三年の間朝子が胸を顫ふるわしながら思つて来た第一のことは、ああこれをこのままみんなに見せてやりたい、そういう激しい願望であつた。このよろこびをうつしたい、伝えたい、そしたらどんなによろこぶだろう。そういう強い願望であつた。みんなというのはもちろん朝子の生れた土地のみんな、こういうよろこびをよろこびたいと思つている正直

なみんなのことで、例えば今劇場の円天井をとび交う歌声をきいても、朝子の深い感激にはまぎれもなく、自分のほかの幾千幾万のここにい合わせない人々の心のよろこびたい熱望が引き剥せない訴えの裏づけとなつて感情に迫つて来ているのであつた。こういう感動の刹那、朝子はいつも自分の素肌の胸へわが生とともに歴史の明暗をかき抱くような激しい情緒を経験するのであつた。

おお

われら 若い者

われら 若い者

バルコニーではまだ歌っていて、しかも初めよりはだんだんうまく歌っている。

朝子は凝つと聴いていて、やがて颯さつと顔を赤らめいきなり涙をあふらした。

「どうかした？」

並んでいる素子がきくのに、朝子は黙つて首をふつた。若者の歌やよろこびの光景は、ここへ来て十カ月ほど経つたとき東京で自殺した弟の保の面影を痛惜をもつてまざまざと甦甦えらしたのであつた。それに連関して朝子の心には声なき絶叫がひびいた。われら、いつの日にかこの歌をうたわん。——われらというのは、やはりこのわれら自分たちをこめて遠いところにいる幾千、幾万だと、朝子は切実を感じるのであつた。

舞台では引続いて、三幕ものの戯曲が演じられた。それはワー

ロージャという青年が、自分の個人的な行動からその列車にのり組んだ仲間全体の計画を齟齬そごさせた責任を感じて、自殺しかけて失敗する。死ねなかつた彼は、その責任を償うために或る重要な献身的任務につく過程を真面目に扱つたものであつた。フアジェーエフの小説にかかれた当時からは十何年か前の時代がその背景となつていた。ワーロージャに扮した青年俳優は、一人の娘をめぐつて、そのものとしては善意な俠気が、政治的な紛糾の種となつてゆく、その見さかいのつかなかつた若い心の動きと悔恨とを巧みにとらえて表現した。見物席は自分の場合のこととしての実感でうけ入れ、批判し、緊張している精神の戦おのきが感じられた。ここの若者たちは、小説をよむのもそういう工合だし、芝居を見

るのも、常にそういう素朴で勁い態度をもっているものであった。

幕間に、今度は朝子たちも席を立って、劇場のなかの大広間を、楕円形の輪をつくって歩いていている人々の列に入った。超満員の今夜は、廊下にまでこの環ははみ出している。

鉢植の棕櫚しゆろのかげにサンドウイツチやお茶を売っているブフェトがあつたが、そちらは黒山の人だ。絶間なく床を擦る夥しい蹠音や喋ったり笑ったりする声々が、濛々たる煙草の烟に溶け合わせられている大広間をめぐるうごく人の環の一つとなつて、芝居の印象と一緒に自分の心の問題の上をも一歩一歩と歩いているよな朝子の心には、くりかえし、くりかえし、さつきの文句がつき上げて来るのであった。ああわれら、いつの日にかこの歌をう

たわん。そして、今夜は、はつきりと感じられるのであった。自分が小説をかくからには、ほかならないこの歌わんとするわれらの生活をこそ書きたいと。

源氏物語を翻訳する教授はいるし、新聞をよむ語学生はどっさりいた。だが朝子は、こういう歓びの同感のさなかでさえ、その感情を感傷で裏づけるほど身近に感じられている悦びへの渴望、それによつて生き、^{たお}殫れる今日の日本のわれら、その生活を自分は描きたいと思うのであった。

芝居がはねて、外套預所のえらい混雑からぬけ出ると、外套のボタンをはめながら、朝子は、今度の話がおこつてから何日にもない晴れやかなところのある眼差しを素子に向けた。うれしいこ

とがあるの、そう囁きたいぐらいの心持がした。朝子はいつか自分でも気づかないうちに問題の焦点を一つひっくりかえして、ここに止るか、止らないかを抽象的に決定しようと思わず、いきなり仕事のテーマにふれて、その成長が可能ならいてしまおうとする自分を感じたのであった。

この都会には何と地球のいろんなところからの人間が集って来ているのだろう。この国自身の内にさえ幾つとない地方語をはらんでいて、一年のうちの大きい集会のある春や秋の季節になると、トウウエルフスカヤの通りだけでも、色とりどりの民族・風俗展覧会のようになった。まだすっかり夏になりきれない五月の風に、

日本の大名縞の筒っぽそっくりな縞の外衣の裾を吹かれながら、その上兵児帯のような帯で前ひろがりにおさえて行く人達は、同じ南方から都にのぼって来ていても、きりつとした長靴、腰のところで粹に短く裾のひろがった上衣に短剣を飾った高架索コーカサスの連中とは、言葉も習慣もちがっているのであった。ジョン・リードのようにアメリカから来て、この国の歴史の一面のうちに生涯を托して城壁の中に墓をもっている男もいる。中国の娘たちの濃い黒髪の切り口は、縞の鳥打帽から肩の上へまであふれて揺れ動いている。

この頃朝子たちのホテルには、ドイツから来た一団の労働者が泊るようになった。新しく時計工場が出来て、そこへ機械とともに

にやって来た人たちであった。男ばかりの一団であった。夜になると、彼等が声を合わせて自分の国の言葉で、この国の若者たちが好んで歌う歌をうたっているのが、朝子たちの部屋まできこえて来た。そして、その歌の節は、朝子たちもやっぱり自分たちの言葉で歌をつくることの出来るものであった。ハンスというケルン生れの機械工の一人はいつか素子と知り合いになって、部屋へも遊びに来た。街角の大きい銀行だの役所の屋根の破風には、その経営の中で機構の清掃が行われていることを市民に告げるプラカードが目立ち始めた。

朝子は、そういう都会の生活の動きを刻々に感じながら、辞書を引く仕事の間には、自分の仕事のテーマについて考えた。

ああ、われら、いつの日にかこの歌を歌わん。いつも朝子の耳には、その文句が鮮あざやかにきこえて来た。そして心はその文句の上を大きくゆるく旋回しながら、次第次第に下降して、その輪が静止したところには、保の死とそれに対する自分の惜しく腹立たしく悲しい心持とが、明瞭に横わっているのであった。だが、今の朝子には、保の死というものが、歌わんとするわれらの鏡としてみればその裏の姿であることが理解されていた。歴史の浮彫にたとえれば、保の辿った路は、その裏の凹みのような関係で、云わば凹みの深さ、痛切さは、肉厚くその凹みのあっち側に浮立っている生活の絵模様を語っている筈なのであった。朝子の心の輪のしぼりは更に小さく接近して、その絵模様をさぐろうと試みるので

あつた。が、それはいつも平面的な図取りとして、朝子の心に映つて来るばかりであつた。図取りの全部が見えている。そつちに見えている。だが、その図取りに自分が体で入って描き出している線というものはなかつた。

新しく瞳られた探索の目をもつて、朝子はすっかり自分自身の心の裡にとじこもってしまった。一緒に食事をしているようなとき、それから素子が誰かと話していて不図視線が合ったようなとき、朝子の二つの眼のなかには自分に沈潜しきつて自分に向つて何か問いただそうとしている真摯な集注した表情があらわれていくことに、素子は屢々しばしば心付いた。そして、その眼つきの裡には素子もないし、朝子に止まることをすすめているひとのかげも入

りこんでいない。そのこともまた感じられるのであった。

朝子がふらりと行先も云わず部屋を出て行って、何時間も帰って来ないようなことがはじまった。帰って来ると、寒い戸外の匂いを髪や外套につけて来た。

二人の感情は微妙に変化して、素子の眼が時々率直に心配をこめて、相変らず出るにも入るにも水色ジャンパーを着て思い沈んでいる朝子の姿に注がれることがあった。朝子には心がどこかへかたまっていて人間の上の空のおとなしき、優しさがあって、素子は本当に言葉通りの気遣いで云った。

「ふらふら歩いてバスに轆かれたりしちやいやだよ」

「だいじょうぶよ」

朝子は笑って答えるが、その笑顔は何か帰って来るまで素子の眼の底にのこるようなものをもっているのであった。

誰にも邪魔されずにこの大きい都会の二つの並木路や河岸や林の間を歩きながら、朝子はこの三年のうちに成長した自分というものをそれ以前の生活に迄さかのぼって隅から隅までしらべ直しているのであった。ここに止って生活する可能が示されたそのところに立って、自分の四隅を見わたしていた。自分がここに受け入れられるよろこびは朝子を真心から震盪しんとうするのであり、それだからこそ、真にそれにふさわしい自分かどうか、自分が作家として自分に納得出来るような業績をもち得るかどうか、そのことについて朝子は執拗に自分をしらべるのであった。朝子は客とし

て、何かのサンプルのようにして、この愛する都の生活に寄食するには、あまりにもこの本当の姿を知つていすぎるし、自分の仕事を愛してもいるのだった。

或る晩、朝子は灯を消してからも永いこと眠らず、考えに耽つていた。カーテンのない大きい窓からは二重ガラス越しにすぐ前の新聞社の建物の屋上が見えていて、正面のイルミネーションの余光がぼんやり夜空を赤くしているのが寝台からも見える。室内の家具はその不確な外光をうけて、黒くうずくまっている。

三年前ここへ二人が着いたばかりの夜も、カーテンのない窓から、朝子は永いことそとを眺めていた。あときはこの新聞社の建物の巨大なガラス張りの円天井が廢墟で、その破れと骸骨のよ

うな鉄骨の間に霏々ひひと雪が降りかかって消えこむ様子は昼間見ていると一層寂しい眺望であつた。

今またこの部屋に臥ふでいて、朝子は何とも云えない思いで城壁の塔の時計が時を打つ音をきいた。この間うちから自分というものをしらべつくしたあげく、朝子は自分が本当にここで書きたいと思うようなものをかくためには、それに必要な日本での生活を知っていないことを、はつきり自分に認めたのであつた。このことのうち、ここでの生活で成長した自分が見られることは何と
いうよろこばしきだろう。しかし、それはどこまでもここで朝子が身につけた成長の幾いくばく何かであつて、朝子にとつて実感のある日本は、三年前の生活の映像であり、それは保の短い生涯を終ら

せ、朝子をここへ送った潮ではあったが、朝子としては直接何もふれていない、その環外にあつて、どちらかと云えば孤独に、平穩にすごされた中流的な日々であつた。今、朝子のかきたいと切に思うのは、そういう生活の日々の姿ではなかつた。もつと苦痛に息づきながら、その歌を歌わんとしている熱心な心の経歴をこそかきたい。人類の歴史の善意につながれながら、全く独自の相貌をもっている日本のそのユニークな歌を描きたいと思う。そのために、朝子はどうしなげなければならないだろうか。最も誠意ある行動として何をしなければならぬのだろうか。

せき上げる思いにつき動かされて、朝子は寝台から起きあがつた。朝子のすべきことは、帰ることだ。そうではないだろうか。

自分の悲しみの在るところへ、或は自分の挫折があるところへ、そこへ真直ぐかえつて、正直にそれらを経てゆくことではないだろうか。その悲しみと挫折とをこそ、ここの生活を愛すその心が愛すのではないだろうか。もし自分に成長というものがあれば、この価値を知る、それが成長の意味ではなからうか。朝子は謙遜な、また体の震えるような生活への熱意を感じ、よろこびと悲しみの^な緬い合わされた涙をおとした。今帰ること、それは朝子にとつては、生活への出発とも思えるのであった。ここから出発してゆく。そのかげには愛する弟のいのちをも裏づけているここの三年よ、もし、自分をここに止めておこうとする好意があるならば、きつと自分がこれから起きたりころんだりしつつ、なおそれを愛

し価値あるものにして行こうとする誠意をもよみしてくれるだろう。

朝子はその夜殆ど睡らなかつた。次の朝はこの北の都に初雪が降つた。窓の前にある建物の屋上に浅くつもつた雪の反射で、朝子たちの薄青い部屋のなかには透きとおつた清潔な明るさに充たされ、いつもより広々したような感じになつた。朝の茶をのみ終つたとき、朝子はしずかな声で、

「私帰ることにきめたことよ」

と云つた。素子が何か云いそうに口をすこしあけた。が、言葉は出なかつた。やはりあたり前の心でいられなくなつて、朝子は立つて窓ベりにゆき、朝の微かななどよめきの中に白く燦いている屋

根屋根を眺めやった。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第五卷」新日本出版社

1979（昭和54）年12月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

親本：「宮本百合子全集 第五卷」河出書房

1951（昭和26）年5月発行

初出：「文芸」

1940（昭和15）年1月号

入力：柴田卓治

校正：原田頌子

2002年4月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

広場

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>